

▲発掘調査の概要

第一次大極殿院西楼の調査（平城第337次）

第一次大極殿院は、奈良時代前半の平城宮における最も中心的な施設です。昨年度からこの地域の復原事業がはじまりましたが、これに必要なデータを収集し、大極殿院南辺の変遷過程を解明することを目的として調査をおこなっています。調査は昨年秋に開始し、冬にはいったん中断していたのですが、4月から再開しました。調査地は大極殿院の正門にあたる大極殿院南門の西側で、面積は1278m²です。

大極殿院南門の東側は1972年に発掘調査されており、南門のほかに、大極殿院を取り囲む築地回廊と、これに食い込むように建つ樓閣建物（東楼）が見つかっています。平城宮の主要な施設は東西対称に配置されることが多いので、南門をはさんで東楼と対称の位置に同様な樓閣建物（西楼）があると推定されてきました。この東楼と西楼は、『続日本紀』のなかにみえる「南高殿」、「南楼」にあたるものと考えられています。この施設では、聖武天皇が何度か宴を催しており、その重要性がうかがえます。

さて、昨年秋の調査では調査区西半を詳しく調査し、西楼、南面築地回廊の一部を確認しました。4月以降、調査区東半も同様に詳しく調べた結果、西楼の全体を確認することができました。西楼は東楼とほぼ対称の位置にあり、規模、構造もそっくりで、大極殿院南門の両脇に、いわば双子のような樓閣建物が建っていたことになります。

もう一つ注目されるのは、大量の木簡が出土していることです。西楼の柱は24本でしたが、建物の外側にあたる16本は深い穴を掘って地中に柱を埋める掘立柱で、建物解体時には、柱を抜き取る



西楼全景（北から望む）

ため、非常に大きく深い穴を掘っています。その穴を掘り下げていくと、深さ1m余りのところに木屑の堆積があり（特に東北隅の柱抜き取り穴では厚さ10cmにおよぶ）、そこから多くの木簡が出土しました。その主なものについて紹介します。

「常食菜甚惡」などと書かれた文書木簡の断片は、常食（役人の給食）の菜（菜っ葉などのおかず）の品質が良くないという下級役人の不満を述べるもので（写真中央）。常食に塩が付いていないことを難じる木簡はありましたが、おかげに類する支給があったことが木簡で確認できたのは初めてです。

このほか、特に注目すべきものに、「天平勝宝四年」（752）の年紀をもつ淡路国津名郡からの塩の荷札があります。これは西楼が壊された年代を考える重要な資料で、東楼の柱抜き取り穴から「天平勝宝五年」の年紀をもつ木簡が出土したこととよく対応します。

今回出土した木簡は、巨大な柱抜き取り穴にゴミとして捨てられたものであり、第一次大極殿院という平城宮の中枢部で見つかった木簡にしては、下級役人の生活臭が強いものです。これらは西楼解体に伴う作業や、それに伴うこの地域の警備に関わる木簡かと考えられますが、今後、新しい木簡の発見に期待したいと思います。

5月18日に、現地説明会をおこない、一般の方々に調査成果を紹介しました。新聞、テレビ等の報道もあり、約400名の参加者が現地を訪れました。調査は6月末まで続く予定です。これからもひきつづき柱抜き取り穴を掘り下げたり、遺構をさらに細かく調べることで、この地域に関する様々な情報が得られることでしょう。

（平城宮跡発掘調査部）



第337次調査出土木簡